



体育心理学：その理念についての思考

大阪教育大学 柏原健三

第32回日本体育学会を神戸の地に迎え、盛会裡に終ることができ、ほっとしているところです。分科会の皆さんにとっても、有意義なものであったことでしょう。

時あたかも神戸においては、ポートピアが開催されていました。こゝ神戸は、海洋を通して共通の場をもち、あらゆる文物が、その必要性和価値観にもとづいて交流を深め、いならば普遍性にのっとっての文化の香り高い環境でもありましよう。

一方、平等と完全参加のテーマのもとでの国際障害者年にもあたり、人間のもつ尊厳さと、生命の重さを認識し、内なる世界を確認するときでもありました。

このように、学会をいやが上にも意義あらしめる舞台は、とゞのっていたかにも思われました。その実、学会も32年の歳月を経てまいりました。人で言うならば、志気はいやが上にも澆刺として、旺盛な活力に満ち溢れている時でもあります。研究の内容も、それにふさわしく、回を重ねるにつれて質量ともに充実してまいりました、ともに喜びたいと思います。

さてこのように述べると、「曲り角」としては、口をさしはさむ余地がなさそうで、結構づくめになりますが、果してそれで良いのかと反省するのも、あながち無駄なことではなからうかと思ひます。

生きた人間をとりまく環境は、人間の欲求するにつれて加速化、拡大化そして均一化を促し、人々の適応も、それにつれて変容されつゝあります。その徴候は、程度の差はあっても、生きた人間からすれば、本質に係わる変容であろうかと思ひます。

研究の分野も多岐にわたり、科学的な方法に基づいて多くの成果を得、まがりなりにも学問としての市民権をもつにいたったとも思われます。がこの時点で、体育のそして体育心理学についての理念を問ひかける必要はないものでしょうか。

反省なき前進は、コンパスなき船にもにて生命体としての人間を空洞化することになりかねないと思ひます。

方法論の確立は言わずもがなであります。目的を明らかにするための手段でもありましよう。手段のみに陥り、それを目的化する愚はさけなくてはなりません。私は、体育そして体育心理学の目的は、生命体としての人間性を究めることであろうと考えております。非力にして力及ばずの感を強くしておる昨今であります。

とめどもなく拡がり、深まる人間性を、臨床法・実験法、統計法などのすべてを統合して、きびしい反省をつみ重ねての前進にしたいものだと思ひます。

関西における体育心理学研究の動向について

近畿大学 森 脇 勤

関西地区において体育心理学研究の同志による研究会を開くことを決定したのは昭和47年の春であった。今日まで10年間・63回の研究会を開き、予め決定したテーマを中心としてお互の理解と討議を重ねてきた。この度はその概要について昭和55年より昭和57年はじめまでのものについて要点のみを記載することにした。内容は開催年月日、会場、話題提供者とそのテーマ、および討議概要について述べる。

- ・昭和55年1月25日(近畿大学会館)。話題提供者、末利博氏、テーマは幼児における運動の調整力の発達に寄与する要因に関する研究、主として調整力と運動能力の関係においては4歳児の方に相関があるように思えること。
 - ・昭和55年3月7日(近畿大学会館)。まず、タケイ機器製の運動調整力検査器による調整力の実演実験とその批判について討議した。つぎに、研究討議の話題提供は藤善尚憲氏・テーマはスポーツカンセリングと催眠技法、討議事項は催眠技法に関連する言葉の意味・催眠技法とその適用課題、今後の課題などであった。
 - ・昭和55年5月16日(近畿大学会館)。話題提供者鷹野健次氏・テーマはメンタルプラクティス研究の展望と考察、この問題は30年前項より関心があり、1967年頃より文献がある。この研究の関心、この言葉と類似の用語・効果の研究などが話題となった。
 - ・昭和55年6月27日、(近畿大学会館)話題提供者船越正康氏、テーマは現代武道観研究—武道に関する意識の因子分析—この問題については特に意識の因子分析の問題が討議された。つぎに森脇勤により現在までの関西体育心理研究の歩みについて報告された。
 - ・昭和55年9月12日(近畿大学会館)。
- 話題提供者は滝省治氏、テーマは水泳場面の適応に関する因子分析的研究、この問題について因子の考え方、項目追加、適応得点などが問題として討議された。
- ・昭和55年11月21日(近畿大学会館)。話題提供者植村由美氏、テーマは身体活動に伴う怖さの因子分析、この問題について怖さとおもしろさは別にすべきであるということも討議された。
 - ・昭和56年2月7日、(近畿大学会館)。今回は、編集委員会よりの依頼事項として編集委員と論文審査委員の選出について日本体育学会編集委員会決定再確認のうえ改めて選出すること、体育心理学専門分科会活動状況の確認と調査、日本体育学会第32回大会体育心理学専門分科会シンポジウムについて討議した。
 - ・昭和56年2月27日、(近畿大学会館)。日本体育学会第32回大会体育心理学専門分科会シンポジウムについて討議し、テーマは運動学習研究の諸問題(3)とし、そのうち、身体障害者の学習指導をとりあげ肢体不自由者の学習指導を主体とし、司会柏原健三氏、演者として大阪身障者スポーツセンターの藤原進一郎氏・愛知県コロニーの矢部京之助氏、障害者の立場より白井正義氏に依頼することを決定した。つぎに一般研究発表座長30名を選出した。
 - ・昭和56年4月24日、(近畿大学会館)。話題提供者福山透氏、テーマとして、ちえおくれ児童の体育的指導・主として基本の運動を中心としての研究に対し討議した。さらに、第32回大会シンポジウム運営について再確認を行なった。
 - ・昭和56年7月4日(大阪身体障害者スポーツセンター)。第32回大会シンポジウムの準備段階として身障者スポーツセンターの実際を見学し、さらに藤原氏・白井氏とシンポジウムの打合せを行なった。

- ・昭和56年9月18日、(近畿大学会館)。この会では森脇勤より第5回国際スポーツ心理学学会世界大会の概要を報告、さらに、日本体育学会第32回大会シンポジウムの反省を行なった。そのほか名簿の作成、曲がり角発行の打合せなど討議した。
- ・昭和56年12月11日、(近畿大学会館) 話題提供者藤善尚憲氏、テーマとして競争意識に関する研究—スポーツにおける人間形成と競争的態度について—この問題を中心に討議が行なわれた。さらに、日本体育学会体育心理学専門分科会会員の名簿、曲がり角発刊についての打合せを行ない、1月中旬まで原稿を集めることが決定された。
- ・昭和57年1月22日、(近畿大学会館)。話題提供者津田忠雄氏、テーマは、スキースポーツ行動の研究—野沢温泉村スキー場におけるスキーヤーの実態調査より—以上のテーマを中心として討議がなされた。そのほか、体育学会の体育心理学の項目内容については改めて検討すること、曲がり角の原稿は2月8日までに集めることが決定された。
- ・昭和57年3月1日、(近畿大学会館)。話題提供者井関典子氏、テーマは、運動場面における怖さを乗り越える勇気について。主に勇気の概念規定と中学生の意識レベルを取り上げた因子分析研究の結果が討論の対象となった。

スキースポーツ行動の研究 I

近畿大学 津田忠雄

目的

大衆余暇時代と呼ばれて久しい現代社会の状況の中で、余暇活動の果す役割は計り知れないものがある。われわれはこの現状の中で展開されるスポーツの大衆化現象に焦点をあて、「労働—余暇活動」という視点から、社会学的、心理学的接近を試みている。本研究は、このような研究の一環として、現代スポーツの大衆化現象の象徴的なスポーツとして捉えることのできるスキースポーツの実態調査を実施し、スキーヤーの実態の分析、把握を通じて、「労働—余暇活動」の研究の基礎資料を得んとした。

方法

- 1) 項目作成：①スキー場の状況(8項目15設問)。②スキーヤーの行動と意識(9項目14設問)。③スキーヤーの余暇活動と余暇意識(5項目8設問)といった3つの視点から項目を作成した。
- 2) 対象：野沢温泉村スキー場宿泊者 4,500人
- 3) 場所：各旅館・民宿。
- 4) 期日：昭和55年12月28日～昭和56年1月9日。

- 5) 回収状況：配布4,500、回収1,526 (回収率33.9%)

結果

本調査は、上述の3つの視点の内容をもっているが、今回は、①野沢温泉スキー場の状況、②スキーヤーの行動・意識について、性年齢別の第1次集計結果を一括考察した。

- 1) スキーヤーは、20代を中心に広がりを見せ、その多くは2～3泊の予定で、3人以上の友人グループで行動をとっている。また、一日平均の滞在必要経費は1万～2万円の範囲であり、かなり高額である。
- 2) スキーヤーの大半は、自分の服装(91.7%)、用具(82.4%)を所持し、その多くは、6万円未満(63.1%)の服装を身につけている。用具は、各人の技術程度による選択が考えられ、男子に中・上級者、女子に初心者、初級者が多く見られるところから、男子の高級品志向は理解されるが、しかし、10万円以上の所持率(41.7%)は注目すべき比率である。
- 3) スキーを始めた時期は、15才～25才未満の年齢幅に限定されることが多く、やや女子の開始が遅れる。また、“きっかけ”

は、人に勧められて(25.4%)始めることが多く、目的として、スキー技術の習得のみに没頭するのではなく、多くは、気分転換、楽しむことといった“遊び”(72.2%)を指向している。このことはスキー技術資格取得率(8.1%)からも理解できる。

- 4) 多くのスキーヤーが、スキーで味わうことのできる“楽しさ”について、「自然との一体感」81.5%、「スリル感」83.7%、「解放感」79.9%などをあげている。そして、「人からはめられたこと」41.5%、「練習の苦しさを乗り越えたこと」38.3%といった事項に対しては、否定的である。女子は男子より、全般的に高い肯定率を示しているのが興味深い。
- 5) スキーをすることによって、獲得できる事項として、高率を示したものに、「自然愛」75.5%、「決断力」74.1%、「慎重さ」72.0%、「集中力」78.3%、「積極性」71.4%をあげることができる。さらに、女子は「意志性」77.6%、「忍耐力」

79.8%といった事項が加わる。逆に否定的であった事項に、「創造性」41.0%、「正義感」37.6%、「指導力」39.8%、「生活の規則正しさ」42.4%といったものがあげられる。

- 6) スキーヤーの多くは、スキーの他にスポーツを楽しむ機会を多くもっており(75.5%)、その内容も多種多様(男子41種目、女子35種目)である。

以上、前述した2つの視点から概述することにより、スキーヤーの実態を明らかにしようとして試みたが、今回は、スキーヤーの余暇活動と余暇意識といった視点から報告したいと思う。

(本研究は、関西の体育心理例会(昭和57年1月22日)において報告したものである。詳しくは津田忠雄他:スキースポーツ行動の研究I—野沢温泉村スキー場におけるスキーヤーの実態調査より—

近畿大学教養部研究紀要 Vol 13—2.1981. 11 PP155—185を参照)

事務局より

事務局が関西へ移った経緯は前記・森脇氏の報告にもある通り、関西支部における10年にわたる地道な活動があったのかと思いますが、現実には、体育学会に直属する体育心理専門分科会の事務局として活動し始めると、今までとは違った問題あるいは積年の問題点が浮かび上がってきました。「曲り角」の発足当初の意図、現在の理念は何かを踏まえ直し、会員相互の研究理解が進む方向で推進したいと念じつつも、地理的・経済的条件が足かせとなって思うに任せないのが現状です。しかし、無駄と不合理を省いて尚かつ質素に運営することが進歩への第一歩かもしれません。以下に事務局運営上の当面の問題点を列記します。かゝる現状認識のもとに進歩のための御意見をお寄せければ幸いです。

- ① 現在、会員名簿記載の会員は108名。会員は全国に散ばり無理なく集まることのできる機会は年一度、体育学会時のみであ

る。その学会にも全員参加は難しく、体心総会時の参会者も20~30名程度である。②総会時に会費(年500円、新入会費500円)を徴収するシステムなので会費の納入が滞るのも止むを得ない。現状は56年度まで完納者37名、滞納延人数208名、未納総額10万4千円也。③本部との連絡、体育学会関係以外に金のかゝる活動は一切していない現状において、57年3月15日現在の会計残高は14万6千円強。約40%が未納です。④郵便代、印刷費等、諸物価の値上がりのため会報の発行も年2回は無理ではないかと懸念しています。

以上の通りですが、今回久しぶりの「曲り角」発行を次回への試金石にしたいと思います。

- ※ 同封の葉書にて新名簿記載事項の返信をお願いします。

体育心理学会会報

「曲り角」

昭和57年3月31日発行

代表 柏原健三

編集 船越正康

連絡先 〒563 池田市城南3-1-1

大阪教育大学池田分校体育学教室

体育心理学専門分科会事務局

電話 0727(51)8331(内)41